鏡の中の顔

深田　良

著者との申合せで検印紙を略します

略　歴

1914年生。（本名　飯野一雄）早大卒。
「日本文化財」の編集長を経て，1960年より無形文化財を軸に専門書の出版社を経営，現在に至る。
「文芸首都」を経て現在「宴」「河」同人。
主著「牛一匹の広場」（現代社刊）「日本の美術」（岩崎書店刊）その他。
日本文芸家協会々員。東京作家クラブ会員。
日本美術教育（INSEA）会員。

〔住所　東京都杉並区天沼３—35—１〕
〒167　TEL(398)4285番

1969・6・10印刷、1969・7・15再版
著者・深田良、発行者・内田保男、祥文堂印刷、
発行所・創思社、東京都四谷４丁目１３番地、TEL（３５３）６９７１番、振替・東京７１３２７番、
￥４８０

落丁・乱丁はお取替えします。

鏡の中の顔

深田　良

装幀・大森忠行

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

序章
第一章
第二章
第三章
第四章
終章
あとがき

鏡の中の顔

病める貝殻に真珠は宿る

―レール・モントフー

序　章

ほの暗い内陣に眼がなれてくると、一歩そのものに近づいた。はじめはその貌がよく摑めなかった。

案内の若い僧は一礼すると、暎子に背を向けて立去っていった。その単調な足音が金堂から長い廊下に溶けこむと、再び辺りは閑まりかえった。

そこに佇んで、しばらく時間を忘れた。

そのとき左側の明りとりの窓から、さっと陽が射しこんできた。その陽はみどりにぬれているように見られた。堂の外はみどりに燃えたつ林なのだ。

陽に半面を照しだされたそのものは、ほのかな蒼味をおびて泛びあがってきた。

白木の台上にみごとな首は据えられていた。

暎子は少し遠ざかり、また近づいた。正面から眼を据えじっと瞶めた。

すると首は切られているのではなく、首の部分に枠が嵌めこまれていることに気づいた。机のような板枠の真中に穴があけられ、そこに首が嵌めこまれて、胴体は枠の下にかくされ沈んでいた。

修理のために、そうされていた。しかし暎子には、板枠の下が暗いだけに、まるで首だけが切りとられて、白木の台上に据えられているように見られた。

息をのむように眺めていた。ちょっと窮屈な感じに促われだした。動けば、現実をとりおとしたこの一瞬が、くずれて了いそうだった。ほの暗さと閑けさに囲まれて、じっと佇んでいた。するとあたりのものが視界から消えて、聖観音の首が、いきいきと眼前に迫ってきた。

いつものような観賞の立場は既に失われていた。

金堂に据えられていた時の、清潔な若さにあふれた青年の迫力は薄らいで、憂いにみちた底深い魅力をたたえていた。

正面をむいた均斉のとれた堂々たる長身も沈んで、薄い衣をまとい、胸もとを瓔珞で飾った華やかないつもの姿は、どこにも見出すことは出来なかった。

しかし、いま首から上だけが投げだされるように何気なくおかれて、今更のようにその貌の深い美しさに魅かれた。

仏の顔ではない。血のかよった充実した顔である。半月形の彫りの深い眉の下に、瞑想にふけっているような切長の両眼、陽の光のために左側の鼻翼が際立ち、染った豊かな頬の下の、ひきしまった口辺にかすかな笑みをただよわせているようにも見られた。

そのとき陽がかげって、顔は薄明に沈んだ。

急に冷え冷えとした閑けさが、かすかな香の匂いをただよわせて肌にふれてきた。惹き入れられるように二、三歩近づいた。そして暎子は、胸の内でこの閑かな時間に耐えていた。必死に早川との相似の破片を、そこから拾い集めていたのだ。いまではその面影は、暎子の胸の底と、この聖観音の顔だけに遺っていた。

その早川は、非情の炎につつまれてもういない。——だから、その面影を求めて白い道をたどり、この薬師寺に訪れてくるのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一、二歩近づいた。そしてそっと手を伸した。首にとどきそうで、とどかなかった。

そのとき再び陽が射してきた。

さっと半面が茜色に頬を染めて、いのちが通ったように見られた。軀の芯に火がついたように身内がふるえた。誘われぐいと魅きつけられた。よろめくように近づいた。

暎子との間は、半メトールも離れていなかった。その距離がもどかしかった。頬を合せ、逞しい腕に抱かれたい衝動にかられた。蓮華座の端に手をついて、かろうじて立っていた。

聖観音は、暎子の強い視線に瞶められて頬を染め、一瞬いきいきと、その両眼をきらめかせたようだった。少くとも暎子は、このときこの像からなまなましい息吹を浴びた感じに促われていた。息苦しく、頭は痲痺れていた。と、ふと強い愛を覚えた。仆れるようにすすみ、顔を近づけた。すると足許でコトリと音を立てた。修理に使う木片を、足先にひっかけたのだ。

それで漸く現実にかえった。隅々に修理のために投げ出されるように置かれている仏の腕や足などが、眼に入ってきた。

さっと辺りが昏れてきた。陽がかげってもう聖観音は白々と泛んでいるようにみられた。幻覚に似た一瞬の時間は去っていた。

しかし、愛の深さと怖しさを捉えた想いで佇んでいた。顔の皮膚が怯えていた。

そのとき若い僧が顔をだした。漸くその場からはなれ、救われるように狭いくぐり戸を押して、廊下にでた。

すると一度に光の波につつまれた。二、三度目ばたきをして、廊下から境内を眺め下ろした。

白壁の塀の手前に、枝葉の伸びた緑樹が、一本立っていた。その下のベンチで、観光客が弁当をひろげていた。その背後に華麗な東塔が、碧空を截るように立っていた。陽に光る塔上の水煙を、しばらく暎子は眺めあげていた。

九輪の上の火焔状のこの装飾は、昔の夢をいまに伝えている。炎の中に天衣を飜して飛び交い、散華し、また笛を口に楽を奏する童児たちが、透し彫りにされている。トロリとしたこの地特有の風に、ゆるやかにゆれているように見られる。

この塔を二人で仰いだのも、ついこの間のこと——。もう二度と二人でくることはない。

眼をあげた。悲しみをつつむように肩を落し、石段をふんで境内に下りた。そして人々から遠く離れた木蔭のベンチに、重い腰を下ろした。

その前を小学生と小犬が、ころげるような恰好で走っていった。団体客が、塔を背景に記念写真を写していた。その辺りは空気まで華やいでいるように見られた。

立ったり膝を折ったり笑ったり、なかなか賑やかに湧いていた。走っていた小犬も抱かれて写されていた。写し終った人たちは、写されている人たちをからかったり、笑わせている。からかわれている人たちは、逆に可怕い眼で睨み返し、わざと済しこもうと力んでいる。老若男女が仲良く、屈託のない風景をつくりだしている。距離があるだけに、無言劇のように眺められた。だが、いまの暎子には、色を失った、まるで異質な世界、遠い人たちのように眼にうつるのだ。そして、徐々と呪縛に似た想いにかられだしていた。恐らく生涯この寺に通い、聖観音の前に佇むであろう、という想いだった。

既に早川の死以来殆んどの休日は訪れている。自ずと足が向くのだ。西大寺で乗換え、閑かな鄙びた西の京駅に佇むとはじめて自身をとりもどし、自身の内奥の声と話し合うことができるようだった。身辺の雑音は洗われるように消えて、独白をくりかえしながら、

白い道をコツコツと辿ってくるのである。そして聖観音に、早川との相似を認め、ほっと溜息をもらしながらベンチに腰を落すのだ。老嬢のように過去の想い出に生きようとしている自身が、悲しくもあったが、どうしようもなかった。

暎子にとっては、早川の死が遠ざかるに従って、逆に実在感が身近に迫ってきた。いたたまれぬ不安な日々が、重くのしかかり痛みを覚えた。その痛みは父の死にも覚えなかったもの。悲しみというものが、このように明確な貌をとって、おそいかかってくるものだということに、はじめて愕きの声をあげたのである。そしてその愛の重さと深さに突当り戸惑い、しぼるように若さを失っていった。

年月かけて彫りあげたものを、自身の手で叩き壊すに似ていた。その飛び散った破片が、逆に無数の鋭い恨みの矢となって、おそいかかってくる惧しさと斗っていた。孤独が身内にこもって、しいーんとした閑まり方で、自身をつつんでいた。

ゆっくりと合オーバーのポケットに手を入れた。そして指先に当った煙草を把りだした。そのとき、恋人らしい二人が、手をとり合って近づいてきた。若やいだ声が耳に伝って、ちらりと眼をあげた。がすぐ伏せて、強くマッチをすった。

恋人たちは、そんな暎子をちょっと目の端で見下ろし、女のふくみ笑いにつれ、男は女の腕をとって足早に前を通りすぎていった。

一瞬ゆらめいた辺りの空気が、再び重く沈んで暎子をつつみはじめた。

深く吸い込んだ煙を吐きだすのに三十才の年令が現われていた。大きな瞳が可怕いように一点をみつづけ、ある考えを——、そう、このベンチに腰を落すたびに、消しても押えても胸底から泛び上ってくるあることを、またしても追いつづけはじめたのだ。

それは早川の死が、暎子にとって不当なもの——、つまり単なる事故死ではない、と思われることだった。

それは一見事故死の粧いはしているが、似て非なるもの——。そう思わせる匂いを嗅ぐことはできた。それは強い圧力と社会の厚い壁に突き当って、そうなるよりほかはなかった者の最後の抵抗の姿でしかなかったが、やはり暎子にとっては、不当な死、という想いからはのがれられなかった。

そして早川の死と同時に、暎子は性を衷い、老嬢の皺が心の襞に深くきざみこまれていったのだ。

第一章

1

ふかふかとした脚の低い椅子は、妙に坐り心地がよくなかった。重い腰をあげた早川は、窓際に歩いていった。

霧雨が降っている。

見下ろせる柳の古木の舗道を、寒々と人々は襟を立てて歩いていた。

黒い影が泛んで消えるように、眺められた。舗道の向う側は河である。ビルに挾まれた河は二、三日来の雨でふくれ上り、ゆるやかに石橋に向って流れていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com